

毎日新聞 2010年5月2日「反射鏡」より

補助金もないのに「やねだん」は栄えた＝論説委員・野沢和弘

ある南の町の300人の集落が国内外から熱い視線を浴びている。鹿児島県鹿屋市の柳谷集落(通称、やねだん)。農業と畜産が主な産業で高齢化率は40%に近い。消失の危機が迫る限界集落に向かっていたやねだんの運命を変えたのが、豊重哲郎さんである。

若いころ東京都民銀行で働き、Uターンしてうなぎの養殖業を営んだ豊重さんは、96年に柳谷自治公民館長に55歳という異例の若さ(?)で就任した。

「地域を再生するためには行政や補助金に頼ってはいだめだ。そこには感動がない」というのが口癖だ。自主財源を得るため災害に強いサツマイモ栽培を思いついた。有線放送で集落の人々に協力を呼びかけると畑の無償提供を申し出る人たちが現れた。毎年100人以上の老若男女が40アールの畑で苗の植え付けに汗を流す。収穫したサツマイモを原料に焼酎を造ったところ、全国から注文が殺到した。最近では韓国のホテルにも納入するようになった。

また、畜産農家が多いためふん尿のにおいが集落の長年の悩みだったが、山林に生息する土着菌を米ぬかに混ぜて発酵させ、これを家畜のえさに加えたところ悪臭が消えてハエも少なくなった。02年、土着菌の生産や販売をするセンターが完成し年間200万円の利益が出るようになった。

先日、医療や福祉について考える「新たな縁(えにし)を結ぶ会」という集まりで豊重さんの話を聞いた。講談師のような独特の節回りで会場は笑いと感動に包まれた。ユニークな自主事業で収益は年々増えた。剰余金で自治会費を7000

円から4000円に値下げし、独居のお年寄り宅には無料で緊急警報装置や煙感知器を設置した。06年には集落の全世帯に1万円ずつボーナスを配った。

ところが住民たちからは「1万円のボーナスはいいからお年寄りに車いすを買ってやってくれ」と言われるのだという。

集落にたくさんある空き家を修理して「迎賓館」にすると、全国から画家や写真家や陶芸作家らが移り住むようになり、集落の人口は増えてきた。やねだんを取材したテレビ番組が中国語と韓国語と英語に翻訳され、海外でも話題になっている。

子ども手当や農家への戸別所得補償などに対するバラマキ批判を浴びているのが民主党政権である。10年度予算編成のために44兆円の借金(新規国債発行)をしなければならず、来年度もマニフェスト通りの予算を組むとさらに借金は膨れあがる。

財源があってこそ、安心してバラマキ(集落の全員に1万円ボーナス)も減税(自治会費の値下げ)もできることをやねだんは教えてくれる。しかし、それよりも高齢化率40%近い集落がどうして潤沢な自主財源を獲得できるようになったのかを学ぶべきかもしれない。

まずは豊重さんの情熱とアイデア、実行力を挙げたい。調子が良い時にはみんなに好きなように言わせて、リーダーは調整型に徹するのもいいだろう。しかし、窮地に陥った時はリーダーの強力な指導力が何よりも大事だ。どれだけ優しい顔を見せカッコいいことを言っても、本気で動かなければ失望は増す。豊重さんの話をじかに聞くと、意志の強さは言葉の重さに表れるということを実感する。

もう一つ重要なのは、住民たちの負担に対する考え方である。農家が無償で畑を提供し、みんなが無償で働く。1万円のボーナスも遠慮して、お年寄りの福祉に回してくれという。税金や社会保険料や利用料を払うとき、私たちはよく「負担を強いられる」と言うが、いったい誰に強いられるのか、それは「負担」と呼ぶべきものかどうか。

政権交代を実現した原動力の一つは、格差社会の負の領域に閉じこめられた人々の怒りであり、負担を強いているものの実体を暴き解体することを欲するエネルギーだったと思う。今、解体されつつあるところに私たちが見ているものは何だろう。

国家と集落では統治の構造も機能も違う。行政や補助金に頼らない暮らしなんて本当にできるのか。一笑に付すことは簡単だ。ただ、1万円のボーナスより、お年寄りの福祉を優先してくれというやねだんの人々を思う。金持ちではないはずなのだ。

「命令や理屈では人はまとまらない。感動して仲間だという実感を持ったときにみんな喜んで働き出す」。この国に欠落するものを豊重さんの言葉は射る。行政や補助金に頼れなくなった今、本当に大事なものを見つめるしかないのだ。